

札幌という都市には落ち着きがない。だから居心地が悪い。なまじ北海道経済の中心地のせいなのだろう。特にそう感じるのはJR札幌駅と大通公園の間の目抜き通り（駅前通）を歩く時である。あつちのビルをぶっ壊し、こつちの道路を掘り返しと、エンドレスにいつも騒々しい。今も地下通路を建設中で、工事関係のプレハブなどが路上に無造作に立ち並んでいる。

この道路沿いのビル群を眺めていると気付くことがある。看板・広告はさまざまな原色に塗られ、景観の統一感がまるでない。大した歴史的観光資源を持たない札幌において、道庁赤レンガ庁舎や時計台という貴重な歴史的建造物の周辺がこのありさまで、北海道に何がしかの憧れを抱いて訪れる観光客も興ざめだろう。

旧拓銀本店ビルはさしたる論議もなく取り壊された。旧拓銀の経営破たんという北海道の歴史に残る経済事件の舞台はあつてなく消滅し、跡地にはこの春、高層複合ビルが完成した。一等地に巨大なビルを建て、テナント料を稼ぐ――。経済の原則に従った行為なのだろうが、歴史の物語を消してしまう文化的損失は金銭に換算しがたい。目先の経済的利益のみを優先する感性が、目抜き通りの騒音や景観に鈍感なのは当然かもしれない。

札幌はモノと飽食が溢れ返る街として人口ばかりが増える一方で、全国で話題となるような先進的な都市政策は存在しない。札幌市役所の巨大な官僚機構は何を考えて日々の仕事をしているのだろうか。

物語を消す街、生かす街

最近、函館を旅した。そこには観光地として発展しようとする街の息吹があつた。キーワードは「物語」にある。路地裏に至るまで、人々の営みとしての物語を再生し、保存しようという市民・行政の意気込みが感じられた。

かつて函館の中心地だった十字街（末広町）に残る旧丸井今井函館店の建物。ここには東北以北で最古のエレベーターがある。今は函館市地域交流まちづくりセンターになっている。「エレベーターに乗りたいた方はスタッフにお気軽に声をかけてください」と張り紙があつた。

人を常時張りつけておく経費はないということで考えた苦肉の策だったらしい。お願いすると、男性職員が対応に出てきて手でエレベーターを動かしてくれた。大正時代に建った建物の由来なども懇切丁寧に説明してくれる。いちいち大変だろうと思つたが、こんな所に外来の客は忘れ難いホスピタリティーを感じるものだ。

旧丸井今井周辺の西部地区は函館が幕末期、欧米列強に開港した街であつた歴史を今に伝えている。五稜郭には箱館戦争、港には青函連絡船「摩周丸」の物語があつた。「土方・啄木浪漫館」では土方歳三や石川啄木が函館に残した思いの数々も知ることが出来る。

函館の魅力はこうした物語が街のあちらこちらに埋め込まれているところにある。榎本武揚が、土方歳三があつた時代、何を考へてこの地を踏んだのか。そんなことに思いを巡らせていると、時がたつのを忘れて

しまう。小さな物語でも、誰も知らない物語でもいい。観光地の楽しみ方とは物語の発見にあるのだと思つた。

「北海道開拓の村」には札幌市にあつた歴史的建造物も数多く展示されている。こうした建物を骨董品として野外博物館に押し込めることによって、街中から物語は消えていく。それで事足りるとしている街は日本国内だけでなく、世界を探しても、そうなのではないか。

株式会社リクルート北海道じゃらんの「2009年道内人気観光地調査」（サンプル数一八七九人）によると、札幌は「過去1年間の旅行先ランキング」で六年連続の一位（七六二人）、「これまでに行つた旅行先ランキング」で七位（一五七七人）と上位に入っている。ところが、「これまでに行つて『満足した』『良かった』旅行先ランキング」では二〇位以内にも入っていない。ちなみに一位は「〇年連続で函館であつた。『もう一度行きたい』と思う旅行先ランキング」でも函館は九年連続一位。札幌の名はここでも見当たらない。

旅という非日常の時間間で札幌の街に足を踏み入れると、この乾いた空気のつまらなさを肌身で感じてしまうのかもしれない。札幌の街中に絶えず響き渡る槌音は、「消費」を至上の価値とする精神的貧困を象徴しているかのようだ。名曲「虹と雪のパレード」で「町ができる 美しい町が」と詠んだ故河野文一郎氏はこのありさまをどんな思いで見詰めていることだろう。

△希▽